

山田氏滅亡のシナリオ

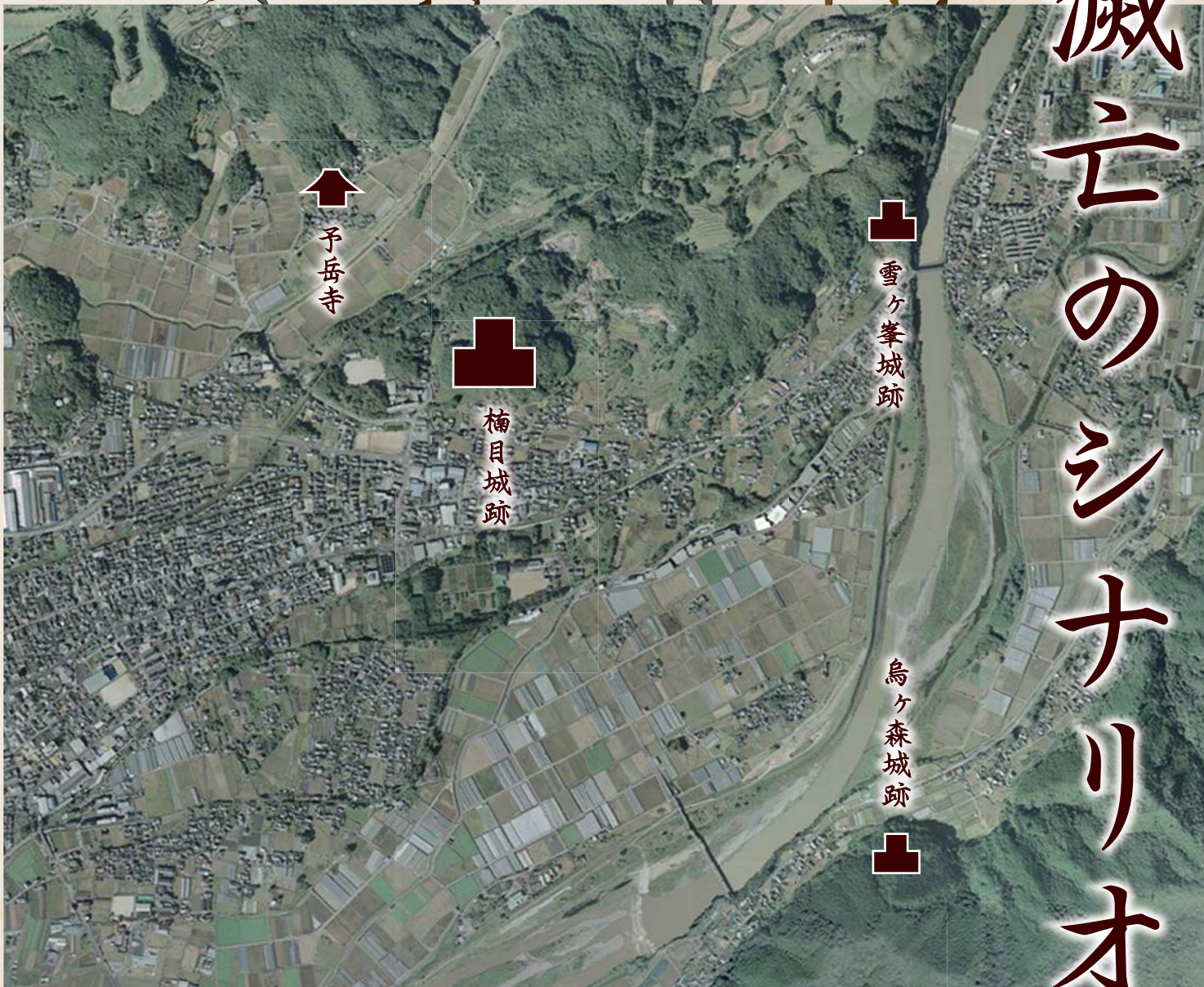
文化芸能をたしなみすぎた
楠目城主・山田元義

山田氏は、中原秋家以来350年にわたり香美の地を治めてきた。その最後の主となったのが山田元義である。

元義は文化芸能をこよなく愛する武将だった。と言えれば聞こえはいいが、茶の湯や猿楽、能にのめり込んで政治をおろそかにし、城主としての務めを果たさないその姿は、「月に酔い花に狂じて、漸く武道もすたれる」と言われたほど。

重臣の山田監物や西内常陸らは、再三にわたり元義をいさめ、武士としての力をつけるよう進言してきた。しかし元義はその忠告に耳を貸さず、逆に、山田氏の未来を案ずる彼らを遠ざけ、蟄居させてしまう。

強固な権力地盤と豊かな財力が、かえって武士としての心を鈍らせたのだろうか。戦国の世にあつておごりや油断は命取り。元義は文化芸能を愛しすぎ、その身を滅ぼした。



雪ヶ峯城跡

楠目城跡

烏ヶ森城跡

予岳寺

烏ヶ森城を切り崩す 長宗我部国親の謀略

楠目城の西、岡豊城から香美の地を虎視眈々と狙う武将がいた。長宗我部国親である。山田氏は国親にとって、父の兼序を討った因縁の相手。また、東に広がる大莊園『大忍庄』の掌握などを考えても、長宗我部氏にとって楠目城は、いずれ落とさなければならぬ城であった。

長宗我部氏の重臣・吉田重俊は、国親にこう進言する。

「城主の元義は取るに足りませんが、重臣の西内常陸や山田監物は知勇兼備の武将。攻略は容易ではありません」

そして1549年、重俊は一計を案じる。

西内常陸の居城・烏ヶ森城に身を寄せる加藤飛弾を「お前はいずれ常陸に殺される。その前に常陸を討ち、手柄をもってわが軍に加われば、重く用いてやろう」とそそのかしたのだ。

これを信じた飛弾は、嵐の夜に常陸を斬殺したという。これが烏ヶ森城の最後であった。

要の武将である常陸を失った元義だが、それでも行いは一向に改まらず、危機感もなく相変わらず能や茶の湯に興じていたという。

楠目城の最後

1549年、ついに長宗我部氏の軍勢が楠目城に襲いかかる。折りしも楽屋芝居を楽しんでいた元義は、敵軍襲来の急報にたただたろうたえるばかり。能の女面を付けたまま右往左往し、家臣に助けられて馬に乗せられたものの軍の指揮もままならず、呆然とするばかりだったという。

しかしここに、雪ヶ峯城で蟄居中だった山田監物が100騎あまりの兵を率いてはせ参じた。監物は各軍に指示を出して態勢を立て直し、士気を鼓舞して駆け回る。これを受けて、山田氏旗下の武将、奥宮・北村・傍土らは、ときの声を上げて奮戦した。

一方監物は、長宗我部配下の猛将・江村小備後と相対する。激しく斬り結び、組み合つて、互いに一步も引かぬ戦いの末、監物はとうとう小備後に討ち取られてしまった。

監物を失った山田勢は総崩れとなり、ついに楠目城は落城。元義は山伝いで東の韮生郷へと落ちのびたという。

元義はその後、現在の物部町久保で没し、予岳寺に葬られたと伝えられるが、阿波に落ち延びたとも、土佐山田町舟谷に墓があるともいわれている。

山田の町はいまこへ?

山田氏の時代、楠目城の南に広がっていた城下町について、『土佐国香我美郡山田郷地検帳』に記録が残っている。西北町に18戸、東南町に20戸の商家が立ち並んでいたようだ。楠目城が長宗我部国親に攻め落とされてから少なくとも40年近くの間、そのままの形で町が残されていたのだろう。

しかし長宗我部元親はその後、ここに住む商人や職人を移住させ、城下町を別の地へ移転させているという。さて、どこへか。

答えは、現在の高知市。江の口川に架かる橋に山田橋という名前が残り、山田町と呼ばれていた。元親が岡豊城から高知に拠点を移すとき、新しい商工都市を生み出すため、山田に限らず、平定してきた城下町の住民を移転させていたのだと考えられている。



1 雪ヶ峯城。城主は山田監物。切り立つような崖に守られ、北の守りを固めた。2 烏ヶ森城。城主は西内常陸。非常に険しい天然の要害で、物部川の流域一帯と高知平野を一望する東の抑え。